

植中直齋筆《日蓮聖人伝絵巻》について —最勝閣聖伝画の下絵との比較を中心に—

長嶺 勝磨（沖縄県立芸術大学）

1973 年（昭和 48）に完成し、身延山久遠寺に奉納された《日蓮聖人伝絵巻》全 36 巻は、日本画家の植中直齋（1885-1977）が日蓮の事績を描いた聖伝画に、身延山久遠寺総務の藤井教雄が詞書を付した 108 段からなる絵巻であり、直齋の代表作である。奈良県に生まれた直齋は、はじめ大阪の深田直城に師事し、1905 年（明治 38）、東京の橋本雅邦の門に入った。1907 年（明治 40）の第 1 回文部省美術展覧会に《落日》で 3 等賞を受けた直齋は、1908 年（明治 41）、鎌倉に居を定め、田中智学に師事して日蓮宗の教義と国文学を学び、1912 年（大正元）に病を得て大阪に帰省するまでの間、師子王文庫の絵画記者として活動した。

直齋の画業については、彼が《落日》発表後に入院して智学の援助を受けたこと、日蓮の御一代記の研究を智学に勧められて以降、晩年に至るまで現地調査と資料収集に努め、《日蓮聖人伝絵巻》の制作に結び付けていったことが先行研究によって指摘されている。しかし、直齋が絵画記者となった時期の具体的な活動については不明な部分が多く、昭和時代に直齋がしばしば制作した日蓮を主題とした歴史画と《日蓮聖人伝絵巻》の図像分析については未着手の状態にある。

本発表では、晩年の《日蓮聖人伝絵巻》の制作に繋がる絵画記者としての直齋の重要な活動として、1910 年（明治 43）に静岡県三保貝島に建設された最勝閣の仏子の間に展示された聖伝画 20 点を取り上げる。日蓮の事蹟 20 場面が描かれたこの聖伝画は、1945 年（昭和 20）の空襲で全て焼失したものの、直齋が制作したものと思われる彩色下絵 20 枚が田中智学先生記念館に現存しており、個々の図像を分析することができる。また直齋の昭和時代の聖伝画として、《立正安国論上書之図》と《柳営対面之図》を取り上げ、その図像を分析する。

智学から自身の絵画布教に必要な画家として高く評価された直齋は、最勝閣の聖伝画の制作において中心的役割を果たした。直齋は全ての聖伝画の下絵を制作して紅児会の小林古径・長野草風・広瀬長江・保間素堂らに制作を委嘱し、自身は 11 場面を担当した。聖伝画の 20 場面は《日蓮聖人伝絵巻》にも描かれており、それぞれの図像には様々な共通点と差異が認められる。また、《立正安国論上書之図》と《柳営対面之図》にはすやり霞が描かれており、《日蓮聖人伝絵巻》の主題・構図と共通する部分が確認できる。智学を恩師と仰ぎ、国柱会の会員となった直齋は、大正時代以降、しばしば日蓮を主題とした作品を制作するようになった。《日蓮聖人伝絵巻》は、日蓮を描き続けた彼の画業の集大成として位置付けられる。